

効果的海外研修プログラムの開発研究 (1)*

山内ひさ子(国際交流学科)
山田健太郎(国際交流学科)
三重野陽平(国際交流センター)

Development of Effective Study Abroad Programs (1)

Hisako YAMAUCHI, Kentaro YAMADA, Yohei MIENO

1. はじめに

長崎県立大学の第二期中期計画の中に、「海外語学研修」が国際交流学科の学生については必修化にすることが掲げられている。これまで「海外語学研修」はカリキュラムの中に開設されているものの、選択科目となっており、研修地はカナダ、アメリカ、イギリス、オーストラリア、中国、韓国に限定されていた。また、このような短期の「海外語学研修」とは別途に、本学には交換留学制度があり、University of Wisconsin, Oshkosh 校、上海外国語大学、高麗大学校、東亜大学校などの各提携校に、毎年、交換留学生平均2名を1年未満の長期留学生として派遣してきた。しかし、短期の「海外語学研修」を必修科目にする場合、毎年1学年の定員相当数(約80名)の学生を海外に派遣することになるため、学内体制の整備と研修機関の拡充が必要となる。

この研究では、国際交流学科の学生対象の「海外語学研修」を平成25年度から必修化するための準備として行った(1)海外研修地の希望調査、(2)研修地の新規開拓、(3)トライアル派遣された学生のアンケート調査の報告とともに、「海外語学研修」を学生の語学向上と異文化体験という観点から、より効果的なものとするための方法を考察する。

山内(2008)が行った九州の33の大学・短大で行われている海外研修の実態調査では、海外研修の成果は主に学生の語学学習のモチベーションの向上にあることが判明している。その調査によれば、これまで効果的海外研修プログラムの研究は日本ではほとんど行われていない。また、海外語学研修に関する出版物は、単に語学研修を請け負っている海外の大学や語学学校が行っている語学研修プログラムの紹介や、企業の海外研修プログラムの紹介にとどまっている。従って、大学内の教育と海外の研修機関で行われている教育を、有機的に結び付けた、より効果的な「海外語学研修」の実施方法を確立することが必要となってきた。それにより、国際交流学科の目指すグローバル人材の育成につながる「海外語学研修」が可能になると考えられる。

2. 「海外語学研修」の必修化に向けた準備

平成25年度入学の国際交流学科の学生を対象に、「海外語学研修」を必修にするためには、あらかじめ準備しておかなければならないことがある。それらは次の4点である。(1)語学研修

機関の拡充と確保、(2) 語学研修内容の吟味と派遣期間や時期の決定、(3) 「海外語学研修」に対する大学の経済的支援制度の確立、(4) 身体的理由などにより、「海外語学研修」に参加できない学生への対応措置の確立。そのため、平成 23～24 年度を「海外語学研修」必修化のための準備期間と位置づけた。

2.1 平成 23 年度の研究

平成 25 年度入学の国際交流学科の学生から「海外語学研修」を必修科目とするために、平成 23 年度には下記の 5 項目を研究し、必修化の準備を行った。

- ① 学生へのアンケート調査により、海外語学研修先の希望調査を行い、研修先に関する学生のニーズを調べた。
- ② 既存の海外語学研修先及び新規語学研修候補地を訪問し、教育宿泊施設の視察、プログラム内容、講師の陣容、学生支援体制と必要経費などについて調査をした。
- ③ 上記の②で集まった資料やデータを分析し、新規語学研修先を選定した。
- ④ 平成 24 年度に新規語学研修先にトライアルとして学生を派遣する準備を行った。
- ⑤ 必修化が実現した場合、身体的都合などで海外語学研修に行けない学生が必ず出ると考えられるので、そのような学生への対応措置の検討をした。

これらの項目について調査・視察・分析するために、平成 23 年度に 11 か所の研修候補地を訪問調査した。また、既存の海外語学研修機関で訪問できなかった 1 か所と新規開拓研修機関の 2 か所については平成 24 年度に山内が訪問した。平成 23 年度の研究により、現地調査をした 11 か所の中から 4 か所を新規研修機関として選定した。

2.2 平成 24 年度の研究

「海外語学研修を必修化」を平成 25 年度の入学生から実施するために、平成 24 年度は次の 4 項目について研究した。

- ① 国際交流学科のカリキュラムの変更による「海外語学研修」を必修科目に変更のための手続きをした。
- ② 新規海外語学研修機関の開拓をした。
- ③ トライアル派遣をした学生の研修状況の視察をした。
- ④ 交換留学拡大のための交渉を開始した。
- ⑤ 平成 24 年度に海外語学研修に参加した学生対象にアンケート調査を実施した。

平成 24 年度は、新たに短期語学研修を派遣した Oxford University, Hartford College, Edmonds Community College, Mount Ida College と、既存の研修機関である Langara College と Monash University を訪問し、学生の研修状況を視察した。また、新規開拓として、Marylhurst University と Southern Queensland University を視察・訪問調査を行った。これら 2 つの機関は平成 25 年度より新規語学研修機関として選定した。

3. 平成 23 年度の学生のアンケート調査結果

国際交流学科の学生の主外国語は、英語または中国のどちらかを選択することとなっているので、「海外語学研修」を必修化する場合、教員は単純に、研修先を英語圏または中国語圏と決めつけてしまいがちではあるが、まず、学生のニーズを調査・分析することが重要である。そこで、平成 23 年前期に国際交流学科の 1 年生 78 名と 2、3 年生 49 名の合計 127 名を対象に、資料

1に示した「海外研修・海外旅行に関するアンケート調査」を行った。このようなアンケートを実施する場合、一般に回答者は選択肢の配列が早い順に選択する傾向がある。今回のアンケート調査では、選択肢に示した地域を、アジア→欧米→その他の順に並べてみた。その理由は、本学がアジアを重視しているからである。

図1は「質問1」で長期留学地についての希望を調査した結果である。

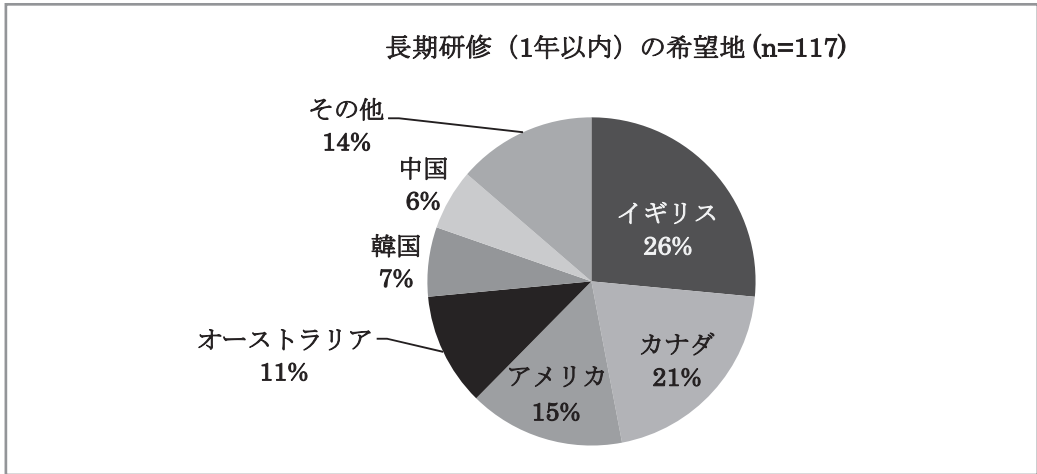


図1. 長期研修（1年以内）の希望地

有効回答数117名のうち、欧米の英語圏を選択した学生が73.5%であった。シンガポールを英語圏に含めると、75.2%の学生が英語圏を選んだことになる。それに対して韓国は7.4%、中国は6.0%であった。従って、欧米圏が81.2%、アジアが18.2%という結果であった。このことから、国際交流学科の学生はアジア地域よりも欧米に目が向いていることが判明した。選択肢の順番をアジアの国々を最初に並べたにもかかわらず、このような結果になったことは、学生のニーズを表すものとして、学科としては重視する必要がある。

図2は「質問2」で「短期語学研修」の場合の研修地の希望をたずねた結果である。

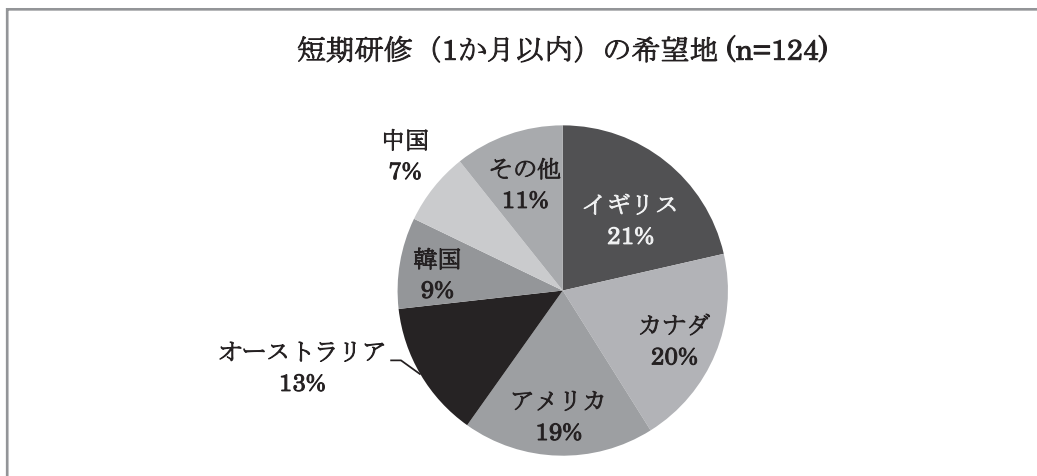


図2. 短期研修（1か月以内）の希望地

有効回答者数 124 名のうち、68.5%が欧米の英語圏を選択した。シンガポールとインドを英語圏に加えると、77.4%が英語圏を選択している。韓国の選択者は 8.1%、中国を選択した学生は 6.5%であった。地域別の場合、欧米圏は 74.2%、アジアが 24.2%であった。短期であればという条件では、アジアを選ぶ学生が若干増えている。エジプトや途上国を選択した学生が各 1 名ずついた。

質問 2 の回答は質問 1 の回答の結果と傾向が似ており、国際交流学科の学生は多くが、欧米圏に短期研修に行きたいと望んでいることが明らかになった。また、本学科には中国語コースがあるものの、研修地として長期、短期のいずれも、中国よりも韓国を希望する学生の方が多かった。

図 3 は短期海外ゼミ旅行の希望地の調査結果である。有効回答数は 114 名であった。

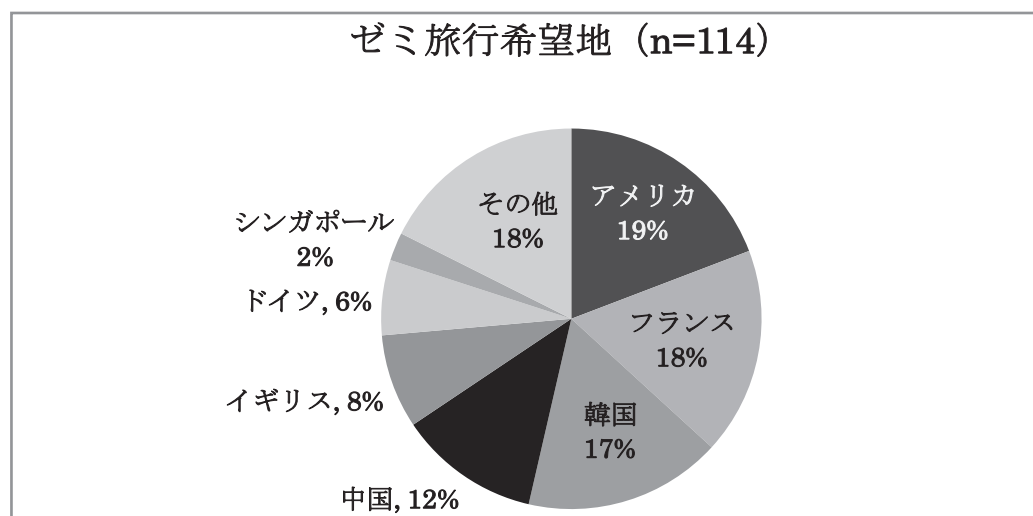


図 3. ゼミ旅行希望地

一週間程度のゼミ旅行であっても、62.3%の学生が欧米圏の地域を選んだ。長期や短期の研修ではさほど人気がなかったアメリカへは「ゼミ旅行」であれば行きたいと思う学生が 34 名もいたことが注目される。ゼミ旅行の場合、「観光」目的の色彩が強く(フランスなど)、「語学習得」、「異文化体験学習」という観点は薄いと思われる。また、ゼミの先生が引率してくれるのであればアメリカ旅行でも安全に旅行できるという考えがあるように見受けられる。国際交流学科に女子学生の割合が多いことが、この結果に反映しているのではないかと考えられる。また、韓国や中国を選択した学生は費用が安価であることが主な理由となっており、観光目的の傾向が強く窺えた。以上の 3 つの質問への回答結果をまとめると、次のようになる。

- ①現時点でイギリスへの語学研修や交換留学が行われていないこともあり、語学研修候補地としては、希望者が一番多い。
- ②英語圏への希望者が多く、長期で 75.3% (有回答数の)、短期で 77.4% (有回答数の) を占めていた。
- ③海外研修先として韓国や中国を選んだ学生は、その理由として「近いこと」、「安価であること」という理由で選んでいる学生が半数であった。残りの半数は中国語や韓国語の学習ができるという理由で選んでいた。
- ④研修の目的として、長期研修では「言語・文化の学習のため」が 75.4% を占め、短期研

修の場合が53.7%であった。それに対してゼミ旅行では観光目的と回答した学生が一番多く、36.2%であった。

4. 新規語学研修機関の開拓と選択

4.1 新規語学研修先の開拓と既存研修先の視察

この研究では、国際交流学科の学生の「海外語学研修」を必修化するために必要となる研修機関の開拓を行った。それは、1学年80名全員を1か所または2カ所の研修機関に派遣した場合、小・中学校の修学旅行と同じで、本学の学生が集団で行動するため、海外体験や語学学習という本来の目的が達成できなくなるという懸念があるためである。したがって、より多くの提携機関を学生へ提供し、一研修機関にはなるべく少人数の学生を派遣できるようにする必要がある。そうすることで各学生が集団行動ではなく、個人行動により、研修先の学生は地元の人とより多く交流する機会を持つことができると考えられるからである。また、この研究では、既存の研修機関も訪問し、研修内容と研修場所、支援体制を視察した。訪問した語学教育機関は、平成24年度に新規に訪問した2カ所を含めると、表1に示す13カ所であった。

表1. 語学研修候補地視察訪問先と面会者

教育機関名	場所	面会者
① Langara College	バンクーバー・カナダ	・ Valerie Peters: Manager of International Education, 他1名
② Simon Fraser University	バンクーバー・カナダ	・ Shawna Williams: International Coordinator, 他1名
③ University of British Columbia	バンクーバー・カナダ	・ Andrew Scales: Director of Centre for Intercultural Language Study
④ Massachusetts State University, Boston	ボストン・アメリカ合衆国	・ Stanley Wanucha: Director of English Language, University Preparation & International Programs
⑤ Mount Ida College	ボストン・アメリカ合衆国	・ Maureen E. Moriarty: Acting Vice President of Enrollment, Management and Marketing, 他3名
⑥ Edmonds Community College	シアトル・アメリカ合衆国	・ Miki Ishihara: Associate Director of International Student Services, 他3名
⑦ North Seattle Community College	シアトル・アメリカ合衆国	・ Sayaka Nickolson: Market Specialist International Program
⑧ Seattle Central Community College	シアトル・アメリカ合衆国	・ Leslie Aest: Director of International Marketing International Education Programs
⑨ SEAMEO RELC	シンガポール・シンガポール	・ Regina Chin: Head Marketing & Procurement Unit

⑩ Oxford University, Hertford College	オックスフォード・イギリス	・ Julie Dearden, Director of International Programmes ・ Fatjon Alliaj, International Programme, 他 2 名
⑪	ハワイ・アメリカ合衆国	・ Larry Smith
⑫ Marylhurst University	ポートランド・アメリカ合衆国	・ Rahi Ghazimorad, Director of PIA at MU; 他 2 名
⑬ Monash University	メルボルン・オーストラリア	・ Mayumi Sakuragi Regional Manager, Education Planning & Development Monash University English Language Centre. 他 2 名
⑭ University of Southern Queensland	ツーウンパ・オーストラリア	・ Katheline Kuzma: Program Manager, English Language Culture & Training Programs. 他 2 名

訪問先のうち、①、②、③については国際交流センターの職員である三重野と山内が訪問した。④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑫、⑬、⑭については山内が訪問調査した。⑪は山田が調査した。

4.2 新規研修先の選択

表 1 に示した 14 ヶ所の研修機関の中から、表 2 に示した 6 ヶ所を新規研修機関として選定した。表 1 の訪問先のリストに入っているカナダの Langara College とオーストラリアの Monash University は、既存の研修機関であるため、表 2 には含まない。これらの研修機関の選定基準は、(1) しっかりした語学及び異文化体験研修を提供できること、(2) きちんとした宿泊場所の確保する体制があること、(3) 空港までの送迎サービスが整っていること、などである。上記の 6 ヶ所の以外にも研修場所としてふさわしいプログラムや体制を整えている教育機関があったが、新規候補地としては 1 地域に 1 研修地を確保することにした。今後、必要に応じて同じ地域に複数の研修地を設けることも必要になると考えられる。

アメリカとカナダ及びオーストラリアの研修機関は、ビザの関係で午前中のみ、週 15 時間の ESL (第二言語としての英語教育) と、午後の文化体験アクティビティを行うプログラムを提供する機関である。シンガポールとイギリスは学習時間によるビザの規制がないため、ESL 授業が午後にも設定されており、さらに文化体験アクティビティも提供する。「海外語学研修」を必修科目にする場合、ある程度研修内容を統一する必要がある。そのための基準としては、(1) 研修期間を「3 週間 (4 週間以内)」とし、(2) 語学研修内容は「週 15 時間以上の ESL 授業と異文化体験アクティビティ」があること、(3) 研修場所として「キャンパス」を使用すること、(4) 宿泊形態は「学生寮 (またはそれに準じる施設) またはホームステイ」であることとした。また、1 ヶ所への派遣人数は 15 名以内とし、本学の学生が 1 ヶ所に多数集中しないようにする。

表 2. 新規海外語学研修先

研修機関	国名・地域	研修内容
Mount Ida College	アメリカ合衆国・ボストン	週 15 時間の ESL と異文化体験プログラム
Edmonds Community College	アメリカ合衆国・シアトル	週 15 時間の ELS と異文化体験プログラム
SEAMEO RELC	シンガポール・シンガポール	週 27 時間の ESL プログラム (含: 異文化体験)
Oxford University, Hertford College	イギリス・オックスフォード	週 25 時間の ESP プログラムと SA との異文化体験プログラム
Marylharst University	アメリカ・ポートランド	3～4週間、週15時間のESLプログラムとボランティア活動及び異文化体験プログラム
University of Southern Queensland	オーストラリア、ツーウンバ市(ブリスベーン郊外)	週 15 時間の ELS と異文化体験プログラム

5. 平成 24 年度のトライアル派遣と研修状況の視察

平成 24 年度の「海外語学研修」に関し、この研究の代表者である山内は国際交流センター職員である三重野と大学法人本部の事務局長である百岳氏と大学の支援体制について協議を行い、大学が学生へどの程度の経済的支援を行うかを見据えた上で、24 年度のトライアルについての派遣の準備をした。経済支援対象者として、英語圏の場合は「TOEIC550 点以上取得者」であること、中国の場合は、「中国語検定 3 級取得者」であることを条件とすることが決まった。支援金額は、イギリスが 20 万円、中国が 8 万円、その他の地域は (アメリカ、カナダ、オーストラリア、シンガポール) は 15 万円とすることも、合わせて決定した。

これらの条件をもとに、平成 24 年 4 月 3 日～6 日に開催された各学年の履修ガイダンスにおいて、山内は「海外語学研修」のトライアル派遣の説明をした。(この時点では支援内容が確定していなかったため、支援金額などの公表を行っていない)。また、三重野は別途に「海外語学研修・留学説明会」を 4 月 9 日、10 日に開催し、集まった学生にトライアル派遣と交換留学の説明を行った。

平成 24 年度に「海外語学研修」のトライアル派遣をした研修機関と国際交流学科の学生の参加者数は表 3 の通りであった。平成 24 年度の国際交流学科のトライアル派遣者は、全員 TOEIC550 点以上を修得しており、大学からの経済支援を受けた。

表 3. 平成 24 年度トライアル派遣実績

	研修機関	国際交流学科の学生参加者数
1	Langara College	8 名
2	Oxford University, Hartford College	5 名
3	Edmonds Community College	11 名
4	University of Wisconsin, Oshkosh	2 名
5	Mount Ida College	1 名

シンガポールの RELC と Mississippi State University は最小参加者数制限を設けており、平成 24 年度は参加希望者数が満たなかったため、派遣には至らなかった。Marylhurst University と Southern Queensland University への派遣は 25 年度以降からである。

本学科の学生が海外研修を行っている時期に合わせ、4 ヶ所の海外研修機関を訪問し、研修状況の視察を行った。8 月に Edmonds Community College を山内が訪問し、授業見学を行うと共に、学生の研修状況について担当者から説明を受けた。Edmonds Community College の担当教員も研修担当者も、本学の学生の学習状況や生活状況については、大変好評であった。

また、山田は以前から語学研修機関となっていたカナダの Langara College を訪問し、本学の学生の研修状況を視察した。とくに、本学の学生の学習状況や生活状況に問題はなかった。(平成 23 年度は、パスポートの盗難にあった学生がいたため、かなり担当者に迷惑をかけた。)

Oxford University Hartford College へは、国際交流センターの三重野が学生を引率して行き、授業と施設、寮生活を視察した。また、Mount Ida College も訪問し、授業と学生寮生活の両方の視察をした。

山内は以前から研修機関となっていたオーストラリアの Monash University を平成 24 年 9 月に訪問し、学生の研修状況を視察した。Monash University の語学研修機関は、2 年前に学内の施設から語学研修場所をメルボルンの中心地に位置する雑居ビルの 3, 4 階に移していたため、非常時の避難などに問題があるのではないかと思われた。

Mount Ida College の語学研修には 24 年度は 1 名の学生が参加したので、山内は 3 月に学生の研修状況を視察に行った。初めての研修地に 1 名のみ参加であり、また、他の語学研修とは異なり、ESL の授業のほか、普通のアメリカ人学生用の授業をいくつか受けさせてもらうという研修であったが、本学の学生の学習態度、他の学生と積極的にコミュニケーションを図る態度などが大変好評であった。本人もこの研修に参加して満足した様子であった。

6. 平成 24 年度トライアル派遣学生へのアンケート調査

平成 24 年度に海外語学研修に参加した学生(国際交流学科の参加者だけではなく、全学部全学科の参加学生対象の調査のため、佐世保校実施の海外語学研修と韓国への語学研修を含む)を対象にアンケート調査を行い、その結果をまとめた。(アンケート用紙は資料 2 に掲載。アンケート結果のデータの一部分を資料 3 に示す。)

アンケート調査結果をまとめると、(1) 本学の海外語学研修に参加した学生は、学習内容、宿泊、フィールドワークなどの活動に概ね満足して帰国している。(2) 語学研修先の教員、担当者、アシスタントなどの指導や支援に対しても、概ねよい感想を持っている。(3) クラス分けができなかった研修先については、英語力のある学生にとってはやや不満があった。(4) 学生の反省として、もう少し積極的に現地の人とコミュニケーションを図りたかったという人が多い。(5) ホームステイの場合、ホームステイ先の家族により、若干、満足度に差があるように思われる。(6) 韓国でゲストハウスに滞在した場合、洗濯物についてのトラブルがあったようである。(7) 後輩に研修先を薦めるかどうかという問いに対して全員が「薦める」と回答しているので、細かいところでは、若干、問題が生じたこともあったようだが、平成 24 年度の海外語学研修は良好なうちに終了できたと考えられる。何より、事故や病気、けがなどがなく、参加者全員が無事に「海外語学研修」を終了できたことが何よりであった。

7. 交換留学拡充の交渉

国際交流学科の学生が英語圏で交換留学制度があるのは、University of Wisconsin, Oshkosh 校のみであり、毎年、2名の交換留学を行ってきた。しかし、近年、交換留学を希望する学生が増えてきており、大学が応じることができない状況にある。そのため、経済的に余裕のある学生は、半年または1年間の休学を申請し、私費留学する学生が毎年数名いる。また、英語圏の交換留学を第1希望とする学生が、交換留学生に選ばれなかったため、応募者の少ない高麗大学や上海外国語大学の交換留学に変更した学生もいる。このような状況なので、英語圏の交換留学を増やす必要性が生じていた。そのため、交換留学の可能性のある海外研修機関と長期交換留学協定の交渉を開始した。交換留学の候補大学はEdmonds Community College、Mount Ida CollegeとUniversity of Southern Queenslandである。このうち、Edmonds Community CollegeとMount Ida Collegeとは、平成24年度に研修視察を行った時に、山内が交換留学協定の交渉を開始した。すでに、交換留学の協定に向けて詳細を国際交流センターと協議中であり、平成26年度から交換留学の実施にむけて準備中である。University of Southern Queenslandは、平成25年度から学生の派遣が始まるので、交換留学の交渉も開始する予定である。(平成25年4月26日に、University of Southern QueenslandのコーディネータのKatherine Kuzuma氏が本学を訪問したとき、すでに交換留学の可能性について話を行った。)これとは別に、Mississippi State Universityとは、平成23年に本学の国際交流センター委員数名が訪問して以来、交換留学を含めた提携関係に向けた交渉が進行中である。

8. 課題と今後の計画

長崎県立大学の「中期計画」に従い平成25年度入学生から海外語学研修を必修化するためには、平成23年度の研究実績より、平成24年度中に下記の(1)～(7)のような課題が残っていた。(1)視察を終えていない研修先(オーストラリア)を視察し、研修先としてふさわしい研修内容であるかを確認しておく必要がある。(2)研修場所をあと2、3ヵ所増やし、10名～15名のグループとして派遣できる体制を整えておく必要がある。(3)トライアル派遣した学生へのアンケート調査を行い、研修プログラム内容について学生による評価を、次年度以降の海外語学研修機関の候補地の選定に反映できるようにする。(4)身体的都合により海外研修に行けない学生や、私費留学生に対して、海外語学研修に代わるプログラムを設ける必要がある。(5)経済的に海外研修の費用が出せない学生への支援の体制も整えておく必要がある。(6)海外研修を25年度入学生から必修にするためのカリキュラムの改訂をする必要がある。(7)「海外語学研修」が平成25年度の入学生から必修化することについて入学志願者にあらかじめ周知させておくことが必要である。

このように、「海外語学研修」の必修化のために準備すべきことが多く残った。

平成24年度の研究実績では、オーストラリアと米国に各1ヵ所の新規研修機関の提携交渉が成立した。また、全学教育としての外国語教育改革により、「海外語学研修」を国際交流学科の学生のカリキュラムでは必修科目とした。また、山内は「オープンキャンパス」や高校との「入試連絡会議」において、「海外語学研修」が平成25年度の新入生より必修科目となったことを説明した。更に、長崎県内の高校を22ヵ所訪問し、各高校の進路担当教員に「海外語学研修」の必修化と経済支援について説明した。平成23年度の積み残し課題であった(4)の私費留学生については他の科目での代替を認めることとなった。また、身体的都合により参加できない学生へ

の対応については、あらかじめ代替科目を開設しておくのではなく、学生から申し出を受けてから対応することにした。

平成 25 年度の新入生から「海外語学研修」が必修科目としてカリキュラムに組み込まれたため、「事前指導」⇒「海外研修」⇒「事後指導」から構成するシラバスを作成することになった。新しいシラバスに沿った「海外語学研修」の効果については、平成 25 年度の参加者対象にアンケート調査を行い、平成 26 年度のシラバスの改善に反映させることになる。この他、平成 25 年度以降に実施すべき事項を掲げる。

- ① 語学研修先における学生の学習、生活状況の視察を引き続き行う。
- ② 海外研修担当者にネイティブ教員も配置し、海外研修の視察を行ってもらう。
- ③ 交換留学の交渉を進め、平成 26 年度から交換留学を実施できるようにする。
- ④ 語学研修参加者へのアンケート調査を行い、次年度のシラバスおよび事前・事後学習指導の改善を図る。
- ⑤ 「海外語学研修」が必須科目であることを、知らせる広報活動を引き続き行う。

上記の実行のために必要な経費を、平成 25 年度も学長裁量研究費に応募し、「海外語学研修」を研修機関の教育に「丸投げ」にするということではなく、積極的に学内の教育と研修先での教育・生活体験を有機的に結び付ける効果的な「海外語学研修」科目の確立を目指したい。それにより、「海外語学研修」の必修化が、単に、語学学習のモチベーションの向上だけの目的ではなく、国際交流学科の学生をグローバル人材として輩出するためのカリキュラム改革という目的を達成することができると思われる。

* この研究は平成 23 年度～平成 24 年度の「長崎県立大学学長裁量教育研究費」による補助金を受けて行った教育研究である。

参考文献

長崎県立大学国際交流センター編 (2013) 『2013 Foreign Language Study Guide』。

長崎県立大学国際交流センター編 (2012) 『2012 Foreign Language Study Guide』。

長崎県立大学国際交流センター編 (2012) 『海外語学研修の案内』。

山内ひさ子 (2008) 『海外語学研修アンケート調査結果』 JACET 九州・沖縄支部研究大会提出アンケート資料 (非出版冊子)。

山内ひさ子、山田健太郎他 (2012) 「平成 23 年度学長裁量教育研究費報告書：効果的海外研修プログラムの研究」長崎県立大学の学長へ提出の報告書。

山内ひさ子、山田健太郎他 (2013) 「平成 24 年度学長裁量教育研究費報告書」長崎県立大学の学長へ提出の報告書。

資料 1

平成 23 年度、海外留学、語学研修アンケート調査

1. あなたが 1 年間海外留学をするとしたら、どこの国へ留学したいですか。(1 ヶ所選んでください。)

- | | | | |
|-------------|----------------------|-----------|------------|
| 1. 中国 | 2. 韓国 | 3. シンガポール | 4. インド |
| 5. アメリカ | 6. カナダ | 7. イギリス | 8. オーストラリア |
| 9. ニュージーランド | 10. その他 (国名を書いてください) | | |

選んだ理由を書いてください。(例：費用、安全、学びたい内容、言語など)

2. あなたが 1 ヶ月語学研修に出かけるとしたら、どこの国の研修に参加したいですか。(1 ヶ所選んでください。)

- | | | | |
|-------------|----------------------|-----------|------------|
| 1. 中国 | 2. 韓国 | 3. シンガポール | 4. インド |
| 5. アメリカ | 6. カナダ | 7. イギリス | 8. オーストラリア |
| 9. ニュージーランド | 10. その他 (国名を書いてください) | | |

選んだ理由を書いてください。(例：費用、安全、学びたい内容、言語など)

3. あなたが 1 週間ほど、海外へゼミ旅行をすることになった場合、どこに行きたいですか。(1 ヶ所、書いてください。(例：フランス、タイ、ハワイ、ソウル、上海など)

選んだ理由を書いてください (例：費用、安全、学びたい内容、言語など)

ご協力ありがとうございました。

資料2

平成24年度海外語学研修アンケート調査

1. あなたは何年生ですか？
 1. 1年生
 2. 2年生
 3. 3年生
 4. 4年生
2. あなたの性別はどちらですか？
 1. 男性
 2. 女性
3. あなたの所属はどの学科ですか？（○で囲んでください）
 1. 佐世保校（経済学科 地域政策学科 流通・経営学科）
 2. シーボルト校（国際交流学科 情報メディア学科 看護学科 栄養健康学科）
4. 語学研修先はどこでしたか？（○で囲んでください）

1. カナダ	ランガラカレッジ	7. オーストラリア	モナッシュ大学
2. アメリカ	ウィスコンシン州立大学オ シュコシュ校	8. 中国	上海外国語大学
3. アメリカ	エドモンズコミュニティ 大学	9. 中国	北京大学
4. アメリカ	マウント・アイダ大学	10. 韓国	高麗大学校
5. イギリス	オックスフォード大学 ハートフォードカレッジ	11. 中国	華橋大学華文学院
6. シンガポール	SEAMEO RELC	12. 中国	西北大学
		13. カナダ	バンクーバーアイ ランド大学
5. 授業時間数はどのくらいでしたか？
 1. 週15時間の言語授業＋フィールドワーク(アクティビティを含む)
 2. 週()時間の言語授業＋フィールドワーク(アクティビティを含む)
 3. 週()時間の言語授業のみ
 4. 週()時間の言語授業とアクティビティのみ
 5. 週()時間の言語授業とボランティア活動
 6. その他(具体的に書いてください)
6. クラスはどのような形態でしたか？
 1. 県立大の学生のみ1クラス
 2. 県立大の学生をレベル別クラス
 3. 他大学の学生と混合の1クラス
 4. 他大学の学生と混合のレベル別クラス
 5. その他(具体的に書いてください)
7. あなたが受講した授業のレベルはあなたに合っていましたか？
 1. ちょうど合っていた
 2. 少し難しかった
 3. 少し優しかった
8. 授業担当の教師はどのような人でしたか？
 1. 大学の教員
 2. 資格のある語学教師
 3. その他(具体的に)

資料3

平成24年度海外研修アンケート結果

資料2のアンケート調査の結果の一部を抜粋して掲載する。番号は質問番号。自由記述の部分は一部省略。回答者数は、シーボルト校と佐世保校を合わせて46名。

1. 語学学研修先

	シーボルト校	佐世保校
アメリカ	13	0
カナダ	12	6
イギリス	6	0
。韓国	1	4
中国	0	4

7. 授業のレベル

	シーボルト校	佐世保校
ちょうどであった	17	9
少し難しかった	2	2
少し易しかった	13	2

9. 教え方は

	シーボルト校	佐世保校
満足	26	13
普通	4	0
不満	1	0

11. 宿泊先の満足

	シーボルト校	佐世保校
満足	22	7
普通	6	5
不満	2	1

13. 短期語学研修中で何か困ったこと

寝ているときに蚊に刺された
日本人が多すぎたので、日本語で話すことが多かった
わからない時はホームステイ担当者に訪ねて、うまくいったので、特になし
ホストファミリーの生活リズムをあらかじめ知っておきたかった
洗濯は週1回と言われ、服が足りなくなった
食べ物が合わなかった
トイレトペーパーがない(中国)

14. 特に良かったと思う点

フィールドワークの充実(アメリカ)(カナダ)
ほかの国の人との交流ができた
勉強だけでなく、観光もできた(アクティビティが充実)
ホストファミリーとコミュニケーションが取れた
自由時間が多かったので、自分たちで計画を立てて行動できた
カナダには様々な人種、文化を持つ人がいたので、多文化理解につながった
新しい友達ができた
リスニングが向上した
町が美しく、人は優しかった(カナダ、アメリカ)

自分に少し自信がついた
RA (Resident Advisor) が良かった (イギリス)
ポータランドー拍研修により、参加学生と信頼関係を築くことができた
他大学の学生と友達になれた

15. 改善希望点

現地の学生やほかの国のの人との交流をもう少ししたかった
日本人が多く日本語を使う機会が多かった
レベル別にクラス分けをしてほしかった (イギリス)
クラスは日本人ばかりだった
アクティビティを取り入れたフィールドワークがあればもっと良いと思った
山登りのアクティビティがあることは早めに知らせておいてほしかった (カナダ)
ホームステイをしたかった (イギリス)
日本語でも OK だったので日本語を禁止して欲しかった
スタッフの人たちと相談する時間が欲しかった
ホストファミリーともう少し関わりたいかった
もう少し長期に (2か月くらい)
課外学習の内容は学生の興味に沿ったものであればよかった
課外学習の内容は学生の興味に沿ったものであればよかった

16. 友人や後輩に薦める

	シーボルト校	佐世保校
薦める	31	13
薦めない	0	0
無回答	1	0

17. 必要経費

	シーボルト校	佐世保校
大学提示金額 とほぼ同じ	19	7
大学提示金額 より安い	9	4
大学提示金額 より高い	3	2

18. 大学からの補助金をもらった学生の感想

	シーボルト校	佐世保校
補助金があったので助かった	17	3
補助金がなかったら参加しなかった	4	0
補助金がなくても参加する価値がある研修 だと思った	9	5
補助金支給の制約が勉強の励みになった	4	1
補助金はすべての参加者に出してほしい	3	0